

式子内親王の忍ぶ恋の歌--歌の強さと独創性

著者	平井 啓子
雑誌名	清心語文
号	1
ページ	31-39
発行年	1999-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000369/

式子内親王の忍ぶ恋の歌

——歌の強さと独創性——

平井啓子

一

百首歌の中に、忍恋を

たまのをよたえなばたえねながらえはしのぶることのよわりもぞ
する
(新古今 恋 一 一〇三四 式子内親王)

式子内親王の絶唱ともいうべきこの忍ぶ恋の歌は、『新古今集』に撰者五人全員の共撰で入集していることから推定して、同時代の歌人に評価の高い歌であったようである。撰者の一人定家は、とくに深い理解を示し、『八代知頭抄』『定家十体』などの撰歌集に入集させているほか、『新古今集』成立からほぼ三〇年経ったころに選出した『百人一首』にも撰んでいる。時間を経ても記憶に残る一首として、心のうちに刻まれていたのであろう。後世、『百人一首』は、かるたとなり、世間に普及して人口に膾炙したので、歌は時代を越えてさらに有名になった。また、この歌は、『溪雲問答』が伝えるような定家との恋物語の伝説を生み、謡曲「定家」に取り上げられて、かなわぬ恋に身をやく一人の女性、式子内親王の懊悩の声とまことしやかに

に言い伝えられてきた。確かに、歌は激しく、心情の熱い思いを全面に打ち出した響きを持つものであるが、題詠であることを考えれば、それも一概には諾い難いものである。けれども、そうかと言って否定する根拠もなく、真実は当事者二人の胸の奥にのみ秘められて、現在まで時を重ねてきている。こうした伝説や謡曲への作品化は、内親王という高貴な身分や、斎院の体験から生まれた歌と実生活に一層の関心と興味を抱かせることになった。式子内親王には恋の秀歌が多いが、これほど話題性に富んだ作品は他になく、独特な歌の響きから言っても、彼女の代表歌であり、『新古今集』中の秀歌であると思う。

この歌についての注釈は、『新古今集』の諸注、『百人一首』の注釈書、そして『自讃歌注』に見え、古来多くの研究者の見解が紹介されてきた。その中の一部を次にあげ、諸説の確認と問題点を整理して、歌の理解の一助としたい。

まず、『新古今集』の古注では、東常縁の『新古今集問書』があげられるが、常縁原撰本にはみあたらない(注1)。そこで、北村季吟の

『八代集抄』(注²)に古説を代表させる。

野州云、忍びある思ひを押返くし月日をふるに、かくてながらへば必忍ぶる事のよわらんと思ひ侘て、命も絶えなば絶えねといへり。あらはればいかなる名にか立んと深く忍心也。よわりもぞするとは末の事を治定していへり。つねにはよわりこそせめと云べきを如此奇特なるにや。

歌の心は、名が立たないように深く忍ぶものであること、「よわりもぞする」は治定の意であることの二点が、あげられている。以後、歌の心については、激しい恋心を詠んだ忍ぶ恋の心深い歌との見解で一致している。ただ、結句の詞については、近年までさまざまに意見が変わり、解釈に微妙な違いを生んでいる。たとえば、塩井正男『新古今和歌集詳解』は断定、石田吉貞『新古今和歌集全注解』は感嘆、窪田空穂『完本新古今和歌集評釈』は詠嘆、久保田淳『新古今和歌集全評釈』は、危惧、懸念とするのである。『八代集抄』が「末の事」といい、久保田淳が、『新古今和歌集全評釈』のなかで、『岩波古語辞典』で「将来に対する危惧、懸念を表す。……」という、末と将来は同じことと考えられる。治定の説では、通常では弱ることとはないのだがこれ以上長くなるときと忍び切れなくなるであろうから、という意になり、久保田淳の説では、もし生き永らえていると、こらえているこの恋心がこらえきれずにそのうち顕われてしまうおそれがある、ということになるであろう。この場合、「おそれがある」は意が弱く、「きつとしのびきれない……」は意が強い感じがす

る。そこでわたしとしては、後者の「きつとし」の治定説を支持したいと思う。

つぎに『百人一首』での注釈を見よう。『百人一首』は、昔から、もっともよく読まれている古典の一つなので、室町から現代まで一般向けの解説書を加えれば、注釈書は数え切れないほどある。季吟の『拾穂抄』、読み物としておもしろい尾崎雅嘉の『百人一首一夕話』等はそれらのうちの一つである。『百人一首古注釈の研究』によれば、宗祇注にその端を発するというが、ここでは、この歌を恋の本意と説いた『小倉山庄色紙和歌抄』(注³)の注を一つだけ紹介することにする。

後白河院第三の皇女なり、これはしのふることの身にあまるを、かいふんおそへ、せきてなとすれとも、つゐにはよはる(注⁴)こともあるへきはとに、このこと、よにもれぬるほとならは、たいしにて侍るほとに、あらはれさる時、たまのをもたえねといふころ、こひのほいとそありつる。

つぎに『自讃歌注』はどういう解釈をしているであろうか。『自讃歌古注集成』(注⁵)より頼阿と宗祇の注を引く。

しのひよりはりてうき名の世にもれては命生きても甲斐なかるへし、とてもたゆへき命ならは此の事のもれぬさきにいかにもならはやとねかひたる心、女の哥なれば哀浅からすや、もそするとはもそせうするといへる言葉也

(頼阿)
これはしのふこひのころふかきさま也、よりはりもそするとは、

かくしのひてもなからへゆかは心もよはりこそせめとなり、相か
まへて、かくのことくの哥を、切に見侍るへきにこそ（宗祇）
頼阿は、「女の哥なれば哀浅からすや」ととらえたところ、宗祇は
「しのふこひのこゝろふかきさま」と言うところが、注意すべき点で
ある。以上のことから、「たまのをよ」の歌は、忍ぶ恋の心を詠ん
だもので、その心深く、女のおわれがよく出た恋の本意とでもいう
べき歌であること、結句「もぞする」の解釈は、時代を追って治定
から危惧へと変化をみせていること、の二点が問題点として整理でき
るであらう。

解釈をするにあたってもう一つ重要な問題に本歌がある。この歌
を取り上げている諸注のうち、参考歌としている歌は少なからずある
が、本歌を指摘する注は意外と少ない。そうした中で、契沖の『百
人一首改観抄』は、早い時期に次の歌を本歌と特定している。

恋しとはいはいはじと思ふに昨日今日心弱くもなりぬべきかな

（古今和歌六帖 第四 一九七）

以後、主だった注は本歌について触れておらず、近年になって日本
古典文学全集『新古今和歌集』が、この歌の参考歌として

思ふには忍ぶることぞ負けにける逢ふにしかへばさもあらばあれ

（新古今 恋三 一一五 在原業平）

を、新潮日本古典集成『新古今和歌集』が、この歌が意識した歌と
して

絶えはてば絶えはてぬべし玉の緒にきみならむとは思ひかけきや

（和泉式部集 五六一）
の歌を掲げている。（この歌を『式子内親王全歌注釈』では、本歌と
している。）歌語の類似や発想の点では、和泉式部の歌と近い関係に
あるように考えられるが、現段階では本歌と断定するのではなく、
これらの歌を参考としたということに止めておきたいと思う。

二

よそにのみ見てややみなんかづらきやたかまの山の嶺のしら雲

（新古今 恋一 九九〇 読人しらず）

に始まる『新古今集』の恋の歌は、当代歌人の歌群に入って

おもひあれば袖に螢をつつみてもいはばやものをとふ人はなし

（同 恋一 一〇三二 寂蓮法師）

おもひつつへにけるとしのかひやなきたあらましの夕ぐれのそ

ら（同 恋一 一〇三三 太上天皇）

から、「たまのをよ」の歌へと続く。これら三首は女性への憧れや、
ひとりだけの思慕を詠ったもので、詞にも声調にもそれほど切迫感
はない。しかし、忍ぶことに耐え切れなくなった思いを詠む式子内親
王の歌には、周囲との調和を図る詞も感情もないようにみえる。た
だ自分の気持ちを最優先させて、身も心も投げ出してしまふ大胆さは、
後に続く恋部の歌にもそうはない。人を愛することを突き詰めていけ
ば、この歌のように自らの命を投げ出すか、「馬を洗はば馬のたまし

ひびゆるまで 人恋はば人あやむるころ」(『感幻楽』塚本邦雄)のように、相手を殺めようとするかの両極に分かれるけれども、女性の心情としては、激しい慕情だけではすまされない怖さがある。そういう点を指して、「女の哥なれば哀浅からすや」と頓阿はいうのであろうか。それにしても、そこまで人を追い詰めていくものは何であらうか。

また、当時の歌が、前述の歌のように、山や白雲、蛩や空と具體的イメージを伴う詞の配列で、豊かな抒情を作り上げているのに比べ、この歌は、「たまのを」というわずか玉と緒を連想させる語のほかにそうした詞はなく、感情や思いを表現する実態を伴わない用語だけから成立している。そして、それを補うように、呼びかけや命令表現、初句切れ、三句切れの技法をふんだんに使い、強い響きの声調で歌の構成がなされている。それは、どのような心の状態、どのような身体の時におきるのであろうか。先行の歌を参考にアプローチを試みたい。

その前に、この歌についての研究を紹介しておく。一つは、石川常彦の論(注6)で、題、想、律の三方面から詳しい分析を試みたものである。氏は、歌の検討の中から、類型の徹底が個性の創出となるまでを詳しく追求している。そうした過程のなかで、歌の創作は建久五年以降、おそらくは正治に近いころ、との見解を明かにしている。『新古今集』の題に見るように、『式内親王集』の題も「百首の譚の中、忍恋」となっているが、それは形態のない百首で、現

在伝わっておらず、百首が何を指すのか、制作年はいつなのかも不明のものである。だから、この歌の正確な制作年は、裏付けとなる新資料の発見でもない限り推論の域を出ないが、作品の出来から、初期のころの作ではないであらうと、わたしは思っている。

もう一つは、後藤祥子の「女流による男歌―式内親王歌への一視点―」(注7)である。氏は、この歌が体験詠ではなく、男性が女性に仮托して詠う歌があるように、女性が男性の身になって詠んだ歌つまり男歌ではないかと言う。そして、その原像を、『源氏物語』の「柏木」に求め、女三宮への愛に苦悩する柏木の心を表現したのではないかとしている。このことについては、論を進めながら考えることにしたい。

三

「たまのをよ」は「玉の緒よ」と書き、万葉のころから、玉を貫き通してつなぐ紐として詠まれてきた。

玉の緒を片緒に撻りて緒を弱み乱るる時に恋ひざらめやも

(万葉 一一三〇八一)

初春の初子の今日の玉箒手に取るからに揺らく玉の緒

(同 二〇四四九三 大伴家持)

また、玉は魂を体につなぎ留めている緒で、宮廷儀礼で天皇などの魂が結び込まれたものである。それから転じて生命をつなぎ留めてい

るほだし、命、生命という意味となり、歌語の玉の緒になる、と『角川古語大辞典』（注8）は説明する。

『新古今集』には、おなじ家持の歌を読人しらずとして、賀部に入れているほか、

たまのをながきためしにひく人もきゆれば露にことならぬかな

（新古今 哀傷 八一五 権大納言長家）

がある。こうした賀や哀傷の歌とともに、恋の歌に詠まれた例も古代から見える。

恋ふること増される今は玉の緒の絶えて乱れて死ぬべく思ほゆ

（万葉 一二三〇八三）

したにのみこふればくるし玉のをのたえてみだれむ人なとがめ

（古今 恋三 六六七 とものり）

たまのをのたえてみじかきいのちもて年月ながきこひもするかな

（後撰 恋二 六四六 つらゆき）

たのめしをまつにひごろのすぎぬればたまのをよわみたえぬべきかな
（後拾遺 恋三 七三三 律師慶意）

などは、「絶ゆ」と合わせて使われた例である。

また、「絶ゆ」が二度くりかえし使われる例としては、

おくれるてなににかはせむたまのをのちもにこそたえばたえなめ
（伊勢大輔集 一六七）

たえはてばたえはてぬべし玉の緒にきみならんとは思ひかけきや

（和泉式部集 五五一）

玉のをはたえなばたえねあさはつね我がわくなみを人にしらせじ
玉の緒とは命なり、あさはつねとは、はづかしくと云ふなり、
是もわくなみとは恋をいふなり。 （秘蔵抄 二三 元方）

がある。三首は「たえばたえなめ」「たえはてばたえはてぬべし」「たえなばたえね」と少しずつ用法が違う。伊勢大輔の歌は、恋しい人に死におくれてもどうしようもない。命が絶えるなら一緒に絶えてしまいたいという歌で、ともに愛の終焉を迎えたいという気持ちが込められている。和泉式部の歌は、伊勢大輔よりは少し婉曲で、あなたが絶えてたなら私も絶えてはてるであろう。あなたがわたしの生きる命になろうとは思ひもかけなかったことなので、と自分の気持ちの意外な展開に驚いている様子が詠われる。三首目の元方の歌は一、二句がほぼ式子内親王の歌と類似している。下句は聞き馴れない言葉遣いであるが、気持ちとしては式子内親王の忍ぶ恋に近いといっていである。私の命は絶えるなら絶えてしまえ、恥ずかしくてお慕いしている気持ちを告げられないからという意であろう。一人の思いに悩む初々しい心が表現されている。

このような用例をもちながら「たまのをよ」の歌が特異であるのは、自分一人の忍ぶ心の苦しさが極限に達した状態で叫びだからにほかならない。和泉式部や伊勢大輔の歌は、対象となる相手が表に出ていて忍んでいなくてもよいのである。つまり、その相手に向っての訴えかけで、言ってみれば愛の深さの証しに命を投げ出してもいいのである。しかし、式子内親王の歌は、相手との関係による命の

破綻を歌うのではない。自らが秘め続けることに耐え切れなくなったことに対して死を考えているのである。相手といつまでも一緒にいたいから死を共にしたいのと、相手を失ったときの絶望感から死を願うのと、一人の思いに耐え切れないで死を願うのと、どれも苦渋に満ちた選択である。こうした覚悟を必要とする心を詠んだ作品に出会うと、この激情は一体何であろうかと思う。

出家した西行が、

なにとなくさすがにをしき命かなありへば人やおもひしるとて

(新古今 恋二 一一四八 西行)

の歌で、死も考えたが命が惜しくなった、と生きることへの執着をたゆたいながら詠うのと皮肉な対照である。さらに、西行には

あすまでの命もがなとおもひしくはくやしかりけるわが心かな

(同 恋三 一一五五 西行)

という歌もあり、逢うまでの命であればいいと思っただけで逢った後の苦しさがあることを知ったと、人の心理をずばり表現している。こうした西行の情に反発するように、式子内親王の心はひたすら強く激しく重い。在原業平のようなおだやかさで、

おもふにはしのぶることぞまけにけるあふにしかへばさもあらば

あれ (同 恋三 一一五一 業平)

と言われれば、相手に気持ち伝わるであろうが、式子内親王のようになんて言われてしまうと、慰めようにもその対処に困惑するであろう。その激情の激しさを評して、安田章生は、「その情熱は自虐の情熱で

あり、それゆゑに、一層切なく悲しいのである」(注9)という。自虐になるまで自己を追いつめねばならなかったものは何であろうか。式子内親王の歌に向かうたびに、不思議となぜがききまとうように感じられる。

いかにせむ恋ぞ死ぬべき逢ふまでと思ふにかかる命ならずは

(式子内親王集 三八二)

我が恋はあふにも返すよしなくて命ばかりの絶えや果てなむ

(同 一七七)

この二首は、発想の類似した歌を『式子内親王集』より抜き出したものである。これらも、恋が死と直結するほどに命懸けのものであることを詠うのである。逢うまでの命、命と引き換えの愛は、式子内親王の歌だけに見られるのではなく、『新古今集』恋三にも散見しており、当時の恋歌のひとつの姿として、追い求めていたもののように考えられる。将来への明るい展望も望まず、孤独のなかで身の処し方に苦慮していた新古今時代の人々にとって、せめて歌の中だけでも愛と言う絶対を信じていたかったのであろうか。

恋うは、乞うと語源を同じくするという。そして「コウ」はもと、相手の魂を自分の方へ招致すること、その呪術をタマゴヒ(招魂法)といったものである(注10)。『角川古語大辞典』には「こふ」は「恋ふ」と「請・乞・祈」が記載されていて、後者の三字はもともと意味に関連性があることを意味している。忍ぶ恋は秘めた恋であるだけに、相手の心をひたすら請い、祈りに似通う精神が強い。そして、

請うことと祈ることは、いちずさやひたむきさを要求するものでもある。また一方、いちずさやひたむきさは、時に懷疑や疑念を生みやすい。まして思いが深ければ深いほど、そうした感情は増幅しやすいといえる。そこで、負の要因をかかえている不安を少しでも取り除くように、人は自虐を繰り返す。繰り返しても不安は収まらず、ますます激しい自虐に陥る。激しい口調、強い詞で自己を鼓舞し、精神の安定を図ろうとするのも、そういう場合におこるのではないであらうか。式子内親王自身の身にこうしたことが当てはまるかどうかは疑問が残る。しかし、そうしたことを考慮に入れても、強い口調で表現された歌からは、心理の機微を鋭く感受する感覚を備えた人でなければ表現できない心の表象が伝わってくる。その感覚がなければ、「たまのをよ」の歌や

いきてよもあすまで人はつらからじこのゆふ暮をとばとへかし
(新古今 恋四 一三一九 式子内親王)
の歌は生まれない。声調が強く、激しい感情の歌は、受けとる側の衝撃も大きい。体験からしか生まれないように思えるこれらの歌は、忍ぶ恋の歌の中でも特異で際立っている。

四

そこで、式子内親王の忍ぶ恋の歌が、他の歌人のそれとどのように違うかを、『新古今集』中の「忍恋」題から抽出してみよう。

しるらめやこのはふりしくたに水のいはまにもらすしたの心を
(新古今 恋二 一〇八六 前太政大臣)
ひとしれずくるしきものはしのぶ山したはふくずのうらみなりけり
(同 恋二 一〇九三 清輔朝臣)
しのばじよいしまつたひの谷川もせをせくにこそ水まさりけれ
(同 恋二 一〇九七 春宮権大夫公継)
後のよをなげく涙といひなしてしほりやせましすみぞめの袖
(同 恋二 一一〇一 太宰大式重家)
しのびあまり天の川せにことよせむせめては秋をわすれだにすな
(同 恋二 一一二九 正三位経家)
これら六条家系の人々の歌には、次に掲げる「忍恋」題の初見とされる『金葉集』の伝統的表現の踏襲がみられるであろう。

たにがはのうへはこの葉にうづもれてしたにながると人しるらめ
や
(金葉 一奏本 恋上 三三八 中納言実行)
ものをこそしのべばいはねいはしろのみにのみもるわがなみだ
かな
(同 三奏本 恋下 四五五 源親房)
また、九条家の兼実、良経親子の歌には、

しのぶるに心のひまはなけれども猶もるものは涙なりけり
(新古今 恋二 一〇三七 入道前関白太政大臣)
いその神ふるの渾すぎふりぬれどいろにはいはず露もしぐれも
(同 恋二 一〇二八 摂政太政大臣)
なには人いかなるえにかくちはてむあふことなみに身をつくしつ

つ (同 恋一 一〇七七 同)

もらすなよ雲るるみねのはつしぐれこのははしたに色かはるとも

(同 恋一 一〇八七 同)

六条家系の人にはない新古今的気分の表象がみられる。

さらに、次の雅経、俊成から二人の天皇の歌を読もう。

きえねただしのぶの山のみねの雲かへる心の跡もなきまで

(同 恋二 一〇九四 雅経)

ちらすなよしのはぐさのかりにてもつゆかかるべき袖のうへか

は (同 恋一 一一一一 俊成)

わが恋はまきのしたばにもる時雨ぬるとも袖の色にいでめや

(同 恋一 一〇二九 太上天皇)

こひしともいはば心のゆくべきにくるしや人めつつむおもひは

(同 恋一 一〇九〇 近衛院)

こうした歌群は、忍ぶ心を表現する時、山河草木の自然現象をか
りて、懸詞、縁語を使用し伝統的な詠法で、生な感情をあらわに表
現することなく歌にしている。それに較べれば、式子内親王の「た
まのをよ」の歌には、その常套は当てはまらない。縁語表現は駆使
されているが、それとなく心を推察させるひかえめな感情の表現では
なく、いたってストレートな感情表現で初めから終わりまで貫かれて
いる。だから、『新古今集』の「忍恋」題の歌の中において、注目を
引き独創性が際立つのである。このような他の歌人になく独創があ
るゆえに忍ぶ恋の歌の代表歌となり、忍ぶ恋といえ式子内親王と言

われるようになったのであろう。ここまで強い個性と独創性を持つと、
後藤祥子のいう、女性が男性に仮托した男歌であるかどうかは、問
題ではなく、すでに男歌、女歌の範囲を超越してしまった歌になっ
ているといえる。

和歌の引用は『新編国歌大観』に、『式子内親王集』は、錦仁『式
子内親王全歌集』に拠った。

注1 新古今集古注集成の会編『新古今集古注集成』中世古注編

(笠間書店、平成九年)

2 山岸徳平編『八代集全註』第二卷(有精堂、昭和三五年)

3 有吉保・神作光一校注『小倉山庄色紙和歌』百人一首古注

(新典社、昭和五〇年)

4 歴史的仮名遣いでは「よわる」であるが、引用の原文が「よ
はる」となっているので、その表記に従った。以下「よはる」
とあるのは、同様の理由によるものである。

5 黒川昌享・王淑英編『自讃歌古注集成』(桜楓社、昭和六二年)

6 石川常彦『新古今的世界』(和泉書院、昭和六一年)

7 久富木原玲編『和歌とは何か』(有精堂、平成八年)

8 中村幸彦・岡見正雄・坂倉篤義編『角川古語大辞典』第四卷

(角川書店、平成六年)

9 安田章生『新古今秀歌』(創元社、昭和二八年)

堀井令以知『語源辞典』（東京堂出版、昭和六三年）

（ひらい けいこ／博士後期課程一年在籍）